

— 寄 稿 —

東日本大震災による被害と対応

—NHO宇都宮病院—

沼 尾 利 郎

1 はじめに

この度の東日本大震災で当院は大きな被害を受けました。地震直後は被災者として救援を受ける立場にあり、その後は逆に支援者として被災者を受け入れてきましたが、この大災害を通じて見えてきたものや今後の課題などについて述べたいと思います。

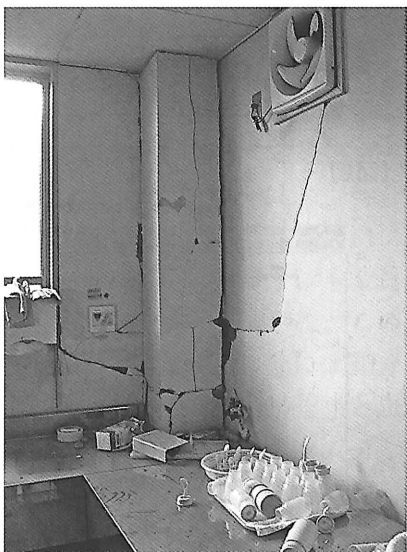
2 水浸しの病棟

地震直後に停電となり、エレベーターはすべて止まりました。一般病棟である西3階の配水管が破損して天井から大量の水が流れ落ち、階段を伝わって2階・1階とも水浸しになりました。一方、重症心身障害者(重心)の病棟は至る所で壁が剥がれ落ちて天井も落下し、柱や壁には多数の亀裂が生じて倒壊の危険がありました(写真1、2)。

さらに、リハビリ棟ではスプリンクラーが誤作動して、ここも水浸しとなりました。

(写真1)

宇都宮病院の被害



(写真2)

3 患者とベットの大幅移動

使用不能となった5病棟あわせて200名の患者さん(入院全体の約3分の2)を、一時的に屋外へ誘導しました。その後、これだけの人数を院内の他病棟にすべて収容するのは不可能であるため、重心の患者さんの大部分(約70名)は隣接する岡本特別支援学校の体育館に避難しました。また、一般病棟の人たちは4人部屋に6人入れたりナースコールの無い「ただの倉庫」に収容したり、内視鏡センターの控え室を利用したり結核病棟の一部を使用したりして、何とか分散しました。

大変だったのは、患者さんとベットの移動を同時にやらなければならなかった事です。ほとんどが動けない人たちなので、3階から1階まで職員全員で非常階段を使って移動した訳ですが、「ウチは3階建てでよかったのかも…?」としみじみ思いました。

4 多方面からの支援と激励

ライフラインが復旧しない状況下での診療や不足する物資の調達などで、不眠不休の職員達の疲労は日毎に激しくなったため、関東甲信越の機構病院に人的・物的支援を要請しました。これにより3月15日~26日まで5病院から合計24名の職員派遣を受けましたが、特に栃木病院には地震当日に重症患者3名を受け入れてもらったり非常食を分けていただいたり、本当に助けてもらいました。

一方、県医師会の太田会長には早い時期に視察に来て頂き、「大田原赤十字病院より被害がひどいかもしれない」との事でした。また、宇都宮市医師会の稲野会長からもお見舞と激励のお電話を頂き、片山理事と金子理事には実際に現場を見てもらいました。さらに石森代議士は地震後数日以内に病院へ駆けつけて下さり、「困った事は何でも連絡して下さい」と心強い言葉をかけて頂きました。

5 被災病院から支援病院へ

当院は災害拠点病院でも3次救急病院でもなく、災害派遣医療チーム(DMAT)を編成することはできませんが後方支援をすることはできます。地震直後に多くの方から支援を頂いて病院機能は少しずつ回復したため、今では被災者の受け入れにできるだけ協力しており、4月14日現在までに20名の被災者が入院しました。ある先生からは「それだけ空床がある、という事でしょ?(笑)」と言われましたが、実際はリハビリ途中の患者さんなどに事情を説明してかなり無理に退院してもらい、

何とかベットを確保した上での受け入れでした。

病院群輪番制病院の被災者受入数 (県医事厚生課4/14現在)

	病 院 名	受入患者数
1	自治医科大学付属病院	42 名
2	獨協医科大学病院	39 名
3	NHO宇都宮病院	20 名
4	NHO栃木病院	8 名
5	済生会宇都宮病院	7 名

6 おわりに

このような混乱の中で患者さんや職員に直接的な被害がなかったことは、文字通り不幸中の幸いだったと思います。困難な状況下でも互いに支えあう現場スタッフの結束力と節度ある冷静な忍耐力に感銘するとともに、「患者さんを守る」という強い使命感と懸命な自助努力の姿勢には、本当に頭が下がる思いでした。この度の大災害を通じて、危機管理の重要性とリスク・コミュニケーションの難しさを改めて実感した次第です。

被害を受けられた皆様の1日も早い復興とご健康を、心からお祈りいたします。